
マブラヴ暴走機械

ゴンザレス＝アキヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マブラヴ暴走機械

【Nコード】

N1342Z

【作者名】

ゴンザレスIIアキヒロ

【あらすじ】

叔父が開発したVRゲームの実験に参加した船頭 海は、一人夏休みをゲーム三昧で過ごす予定だった。

しかし、実験は失敗。

カイの肉体は現実世界では死亡してしまう。

そして、自分の体が死んでいることに気づかないカイは、そのままゲームを進めていく。

しかし、その世界の人間はともゲームとは思えず、敵も生々しい。

果たしてそこは現実なのか、異世界なのか、ゲームの世界なのだろうか。

降り立ち、世界は変わり始める（前書き）

移動しました、すみません m（　　） m
ゴンザレスと言います、見ていただけたら、嬉しいですよ。

降り立ち、世界は変わり始める

少年が目を開けるとそこには、荒野が広がっていた。

「うむっ、流石オジキの創った世界だ！
リアルと何ら変わりないなっ！」

そこで少年は、感心したように声を上げる。

少年の叔父である、船頭 拓也 が創ったゲームの初実験に参加した、船頭 海 は、初めて見たゲームの世界に感激していた。

「……よし、早速ゲームを開始しよう」

カイはそう言うのと腕に装着された、機械のような物を操作する。

機械の操作方法は、予め叔父から説明されていたので、迷う事はない。

操作が終わると、少年の目の前に半透明の画面が出現した。

船頭 海

初期ポイント 10000
現在 技術力Lv1

「開発可能なのは、何があるかな？」

カイが更に目の前に現れた機械を操作する。

ザク1

必要技術力1

開発必要ポイント 2000

生産必要ポイント 500

ザク2

必要技術力 3

開発必要ポイント 3000

生産必要ポイント 600

カイはそこまで見ると、画面を見るのを一旦止め、顎に手を当てて考え始めた。

（確かポイントは、敵を倒せば手に入る。

そして、技術力は色々開発させれば上がるんだよね
それなら、まず旧ザクを開発、生産してその後ポイント稼ぎをしようかな）

とりあえずカイは、色々と開発できる物を開発していき、その後ポイントを溜める事に決めた。

ここはゲームの世界、装備を整え、レベルをコツコツ上げていく事が肝心だ。

カイは開発可能な物の欄を見て、まずは旧ザクの開発を開始させた。

すると、画面には

『旧ザクの開発を開始します、開発完了まで残り0時間10分00秒』

という画面に変わる。

（開発には時間が掛かるのか、結構凝ってるな）

カイはそう思うと、人工食料開発Lv1、CPU開発Lv1を選択し、その後岩に腰かけた。

CPUとは、自分が操作するMS^{モビルスーツ}以外を自動操縦してくれる、装置だ。

その他にもアンドロイド開発Lv1や、MS次元収納庫Lv1等もあったのだが、技術力とポイントの関係でカイは諦めるしかなかった。

（確か開発しても、生産しなければ意味がなかったんだよね。残りはCPUが3000必要で食料が500、旧ザクが3000必要だったから、のこり3500ポイントしかないか。）

その後カイは、武器開発Lvと修理技術開発Lv1を発見し、ポイントを使った為、残り1500しかポイントを残せなかった。

「よし、旧ザクの開発が完了したか。
生産開始、そして、武器の生産も」

するとカイの目の前に、光の粒子が集まり、旧ザクが出現。

そして、次にヒートホークとザクマシンガン、クラッカーも、旧ザクに装備された状態で出現する。

最も、ヒートホークはザク？用であり、ザクマシンガンも105mmの物だ。

そして、これでポイントは残り850になってしまったカイは、本格的に敵を狩に行かなければならない。

カイは浮かれた気持ちで、旧ザクに搭乗する。

カイは旧ザクに乗ると、機体を稼働させた。

旧ザクのモノアイが光、旧ザクはカイの操作によって歩き始める。

（流石に本物と違って、操作は簡単にしてあるみたいだな。
転ぶ事もなかったし）

カイはそう思うと、荒野の中をザクに走らせた。

「お、敵発見」

しばらくザクを走らせていると、カイはレーダーに赤い点が映るのを見た。

赤い点の数は10ほど、序盤にしては多いとカイは感じたが、早く戦いたかった為、カイはその方向にザクを走らせた。

「いた!……随分気持ち悪い外見の敵だな」

カイはザクのモノアイから送られてくる映像で敵を確認し、そう感想を洩らした。

しかも、レーダーに移った赤い点は、どうやら重なっていたようだ。

モノアイから見た敵は、数えられないほど、うじゃうじゃ蠢いている。

二本の白い腕に長い首を持ち、多足の生物で、カイは敵の見て何故

か嫌悪感が沸いてくるように感じた。

敵ももう既にカイの存在には気づいているようだ。

凄まじい勢いで、カイの旧ザクに突撃してくる。

カイは3つのクラッカーを敵に投げつけ、スラスターで後ろに後退する。

クラッカーは地面に落ちると爆発し、大量の敵を爆死させていく。

（敵の体液が飛び散るって、これは明らかにR18設定だろ！）

カイはそう思いながらザクマシンガンを連射、ほぼ全ての敵を撃ち殺し、クラッカーを投げて残りを片付けた。

そして、カイは画面を出現させ、ポイントを確認する。

（おっ、2810ポイントになってる。

敵は50体くらい居たから一体につき40ポイントくらいか）

カイはそう思うと、10ポイントを消費して食料生産を発動し、食

料と水を出現させると、カロリーメイトのような物を食べる。

（不味い、食料開発のレベルも上げないといけないみたいだな）

カイはその後、更に2000ポイント近く消費し、旧ザクとCPU、武器のセットを出現させた。

（これで僚機の出来上がりか。

これから暫くは、敵を狩ってポイントを稼いでいこう。）

カイはそう思うと、僚機と共に索敵を開始した。

ひたすら、無限に沸いてくるように思える敵を狩り、無理ならばスラストでカイ達は撤退していく。

CPUには簡単な命令しかできないようだが、撤退くらいならば命令できるようだ。

カイは戦っている内に、二機ではきついと気づき、ポイントが入り次第どんどんCPUと旧ザク、武器のセットを作っていた。

そして、MS部隊が20機程になると、カイは後方に下がり、CPのMSに戦わせながら、ポイントを使って開発させ始めた。

既に技術力はLv2に上がっていたので、ザク？開発には残り1レベル必要だ。

旧ザク達の弾薬補給や修復を、ポイントを消費して済ませたカイは片っ端から可能な開発を進めていく。

途中物凄い勢いで突撃してくる、違う種類に見える敵がいたが、スラスターで勢員空中に回避し、後ろからザクマシンガン撃って仕留めた。

その敵は、巨大だった為か1体につき100ポイント貰える。

かなりの高度のようだが、ザクマシンガンの集中放火なら、正面からでも倒せるようだ。

武器補修技術開発や、MS強化技術開発を発動させながら、突撃してくる敵を倒させていく内に、カイは漸く技術力が上がったのを確認した。

これで、ザク？の開発が可能になる。

カイは早速ザク？の開発を開始させ、今回は一旦撤退する事に決めた。

降り立ち、世界は変わり始める（後書き）

閲覧ありがとうございました m
〔 m

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める（前書き）

よろしく願います

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める

撤退したカイは、建造物開発LV1をポイントを使ってLV2に上昇させ、拠点を設置した。

見張りは八時間稼働可能な、CPUに交替制で4体ずつさせることにして、カイは眠る事にした。

次の日、カイは目覚めると日用品生産LV1で生産した服を着て、食料生産LV2で生産した食料を食べる。

その後歯を磨きながらカイは、ぼんやりとこれからの予定を考える。

（今は夏休みだし、ゲームの中では時間が現実よりも十倍遅く進んでるんだよな。

ゲームに飽きるまでは、暫くこの世界にいても問題ないだろう。）

カイは現実では、栄養剤を一日三食注射されると聞いていたので、1ヶ月くらいは遊べるだろうと考えていた。

それ以上になると、現実に戻った後のリハビリが面倒なので、よほ

どゲームにのめり込まなければ大丈夫だと、カイは考える。

「とりあえず、ザク？の御披露目だな。」

カイは丸いドームのような形をした建物から出ると、ザク？を生産する。

「……おお！これこそザクだっ！」

見た目は旧ザクと同じく緑色だが、多少ゴツくなったその姿はまさしく有名な量産型のザクだった。

カイは武器生産能力Lv2で生産した、120mmザクマシンガンとヒートホーク、クラッカーを装備させると、ザクに搭乗した。

「ふふ、これこそMSだ。……ザク？を否定する訳ではないが」

カイはそう言うと、早速旧ザク20機を引き連れて、拠点から出撃した。

唸るザクマシンガンが、発見した敵を直ぐ様挽き肉に変えていく。

挽き肉とはいっても、口を近づけるのすら嫌悪するような物質だが。

途中凄まじい数の敵を見つけた時は、流石にクラッカーを投げつけながら撤退したカイだったが、僚機が脱落する事は一度もなく、逆にザク？をカイは2機更に生産させていた。

（数は多いが敵は強くないな、敵の装甲は結構硬いみたいだが、120mmと105mmザクマシンガンの集中砲火なら沈められるレベルだ）

結局その日は、カイ達はひたすら敵を狩り続け、技術力を上げる為にカイはどんどん開発にポイントをつぎ込みながら、MSを少しずつ増やしていった。

「ようやく技術力LV4になったか、なかなか上がりにくいみたいだな」

カイはそう言うと、僚機の弾丸を生産し、補給させていく。

そして、この日は特に目新しい敵が出現する事はなく、カイは拠点に帰還した。

そして、次の日もカイは同じように出撃した。

作業ゲーではないかとカイは思い始めていたが、開発できる物はなかなか多岐に渡っていて面白い。

当面のカイの目標は、技術力LVを5に上昇させ、新MSを開発する事だ。

ザク？ 20機と、ザク？ 7機で構成された部隊は、今日も敵を作業のように殺害していく。

「数は力らしいが……それは、同じレベルの時に限るらしいな」

カイはそう言うと、欠伸をする。

「ん？何が近づいている」

カイの見るレーダーに、不意に凄まじい勢いで迫る黄色い点が映った。

そして、次の瞬間旧ザクに光線が飛来し、旧ザクを大破させた。

「な！？何処から撃ってるんだ！

レーダーには、何も映っていないぞ！？」

カイはそう叫ぶと辺りを見回すが、敵の死骸しか辺りには存在しない。

しかも、そうしている間に、光線は再度カイの部隊に向かって飛来し、二機目の旧に命中した。

旧ザクの残骸は、粒子となって消えていくのを見ると、カイは僚機に撤退命令を出す。

各機はスラスター全開まで噴出し、拠点に向かって猛スピードで帰還していく。

しかし、それでも敵は無慈悲に三発目の光線を、放ってきた。

カイの近くにいたザク？は、回避行動を取ろうとしたが間に合わず、光線はザク？に当たり、ザク？を大破させた。

しかし、ザク？はギリギリ耐えたようで、爆発する事も粒子になっ

て消える事もない。

カイは近くの僚機に、ザク？に大破したザク？を運ばせる。

そして、更にカイは旧ザクを一機失う事になったが、何とか光線の範囲外から抜け出す事ができた。

「敵の攻撃はジムのレーザーライフルくらいのレベルか。
ガンダムクラスでなくて、まだ良かったな
まあ、ある程度ゲームバランスは整えられているということか」

カイはそう言うのと、拠点開発にポイントを投入する。

元々拠点は防御力が高いようだが、レーザーには一発ほどしか耐えられそうにない。

カイは拠点のレベルを一気にLV4に上げ、一息ついた。

（超遠距離攻撃が可能な敵か。

ザク？でも大破するレベルだから、早急に対策を練らないと不味いな。

光線を撃つ敵が大量にいたら、即ゲームオーバーだ）

カイはそう思うと、MS改造LVに目をつけ、MS改造のにポイン

トを振っていった。

（このレベルをあげれば、MSの強化をポイントとレベル次第だが、行えるみたいだな）

カイは早速自らのザクを強化させていく、まずザクの頭にブレードアンテナを付け、色を赤色に着色させる。

これにはほとんどポイントを必要としなかった。

しかし、次の対レーザー用コーティングLv4は、一体につき1000ポイントを必要するようだ。

カイは迷わず自らのザクに付加させた後、暫く迷う。

（まだポイントには余裕があるが、一体につき1000ポイントは高いな）

カイはそう感じて、現在いるザク八機にだけ対レーザーコーティングを付加させる事に決めた。

そして、その後幾つか開発を進めていき、カイは就寝した。

そして、次の日もカイは出撃し、敵を駆逐していく。

数時間の間狩り続けたが、レーザーが飛来することではなく、カイはこの日は早めに切り上げることにした。

（技術力がなかなか上がらん、だがもう少しで上がりそうな気がするな）

カイはそう思い、次の日に備えた。

そして、カイは次の日も敵の討伐の為に拠点を出発した。

敵を狩ること三時間、カイ達部隊に向かって遂にレーザーが飛来し、カイは奴が来たことを察知した。

カイ達は直ぐ様突撃してくる敵にクラッカーを投げつけ、スラストの推進力を駆使して、閃光が飛来してくる方向に向かって突き進んでいく。

途中運良くレーザーを回避できる事もあったが、旧ザクは命中すれ

ば一撃でやられていく。

（今のところザク？に三発命中し、同じザク？には二発命中したが、耐えられている。

どうやら、対レーザーコーティングLV4は有効みたいだな。）

カイがそう感じていると、何故か途中で飛来してくるレーザーの数が増えていった。

どうやら敵は複数いるらしい。

カイのザクのレーダーに遂に、敵を示す複数の赤い点が映った。

「よし、行ける！」

次の瞬間ザク？に光線が命中し、ザク？が大破する。

どうやらレーザーに耐えられるのは、五発が限界らしい。

カイは7000ポイントを消費し、ザク？全てに耐レーザーコーティングを塗り直させると、目の前にいる眼鏡をかけたような気持ち悪い生き物と、ずんぐりした生き物にザクマシンガンを連射させていく。

十体程いた新しい生き物は、ザクマシンガンの弾に当たり、あっさり爆散していく。

どうやら敵は、防御力は大した事はないようだ。

その後、回りに護衛のように着いていた敵も片付け、カイは達成感に満たされる。

（光線を撃つ敵は、一体につき1500と1000か。

周りにいた敵のお蔭で、赤字にはならなかったが、効率は悪いな）

カイはそう思うと、拠点に帰還した。

カイは拠点に向かったのだが、そこには文字通り何もなくなっていた。

どうやら耐久力以上のダメージを受け、粒子になって消えたらしい。

そこには変わりに、敵が蠢いていた。

「ちっ、魔物の分際で俺の住処に手を出すとはな。
報いを受けろ！」

カイの言葉と共にザク達は発砲を開始し、魔物達を殲滅していく。

「これは拠点に護衛を置くべきだったな。
迂闊だった」

カイはそう言うと、他の場所に拠点を設置し直すことに決めた。

（MSも残り自機も合わせて七機しかないから、早急に部隊を建て
直す必要がある）

カイは一先ず拠点を造り直し、MS部隊を建て直す事を決めた。

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める（後書き）

閲覧ありがとうございました m (m

脅威の陸上型MS（前書き）

よろしくお願いします。

脅威の陸上型MS

カイは拠点となる場所を探して、スラスターで飛行している途中に、街のような場所を発見した。

街とはいっても人気は全くなく、廃墟のような街並みが広がっているだけだったが。

（そういえば荒野辺りしか策敵しなかったが、確か宇宙から来た侵略者を倒すとかいう設定だったから、人間がいてもおかしくないんだよね）

カイはそう思うと、辺りをザクのモノアイ越しに見回すが、やはり人間の姿は一人も見当たらなかった。

「……一先ずこの辺りには拠点を設置するか。」

カイはそう言うのと、廃墟から少し離れた地点にLv4の拠点を設置した。

その後カイは自らの赤いザクを眺めて、暫くの間考える。

（このザクは確かに塗装しコーティングはしたが、それ以外はただのザクだ。

しかも、俺の操作技術はあの赤い彗星には遠く及ばない。

それなのに、大佐と全く同じ外見にするのは、もしかしたら大佐に失礼なのではないだろうか。）

カイはそう思い始め、自らのザクに黒い模様を施す事にした。

その後更にカイはザクを改造し、機動性を強化させる。

強化はLv4のためか、機動力は1，4倍になった。

（後10％低ければ……いや、気にする必要はない）

カイはその後、何気なく武器開発をLv3に上昇させた。

武器開発は、この技術力ではこのレベルが限界のようだ。

そして、30分が経過し、武器開発が完了すると同時に、カイの技術力がとうとうLv5に上昇した。

「よし、此でついにドムが生産できる！」

カイはそう言うと、ドムの開発を開始させた。

ドムの開発には15000ポイント必要な上に、開発時間一日掛かるようだが、仕方がない事だろう。

開発には大量のポイントが必要だが、量産型ならば生産にはそれほどポイントはかからない。

しかもドムは、ザクとは違い元々陸戦型の機体だ。

この地球では、多いに活躍してくれるだろう。

ザクでは地上で俊敏な動きをするのには、改造する必要があるが、地上用に開発されたドムならばホバー移動が可能で、俊敏な動きができる。

更に武器開発LV3になり、増えた武装の中にヒートサーベルが存在した。

これをザクにも装備させれば、近距離戦闘も有利に進められるようになるだろう。

（後は、自機をどうするかだが……せっかくザクの操作に慣れたのに、武装の違うドムに変えるのもな）

カイはそう思うと、自機を更に改造していく事に決めた。

脚部を改造して、ホバー移動を可能にし、スラスターの強化、装甲の強化をしていく。

本来なら無茶苦茶な改造なのだが、ゲーム故に可能になってしまう。

「魔改造ザク？、とは言ってもゲルググには劣るな。地上用の自機の変更は、出来ればゲルググにしたい所だ」

カイはそう考えるが、次に開発出来るようになる機体は、おそらく水中用だろうと予想していた。

このゲームはジオン版だった為に、連邦のMSは存在しない。

ジオンからティターンズの機体を開発を進めていくと、なっていくとカイは聞かされていた。

（ビーム兵器は水中戦用以外は、しばらく先になりそうだな）

カイはそう考えるが、それほど危機感はない。

あえていうなら、ビームを撃ってくる魔物が大量に現れれば危険だが、どうやら技術力が上がれば生産コストは少しずつ下がっていくらしく、対レーザーコーティングの必要ポイントが950に下がっていた。

しかも、レベルを1上げたので耐久性も上昇している。

このまま技術力を上げれば、レーザーを撃つ魔物も克服は可能。

他の敵は120mmザクマシンガンの敵ではない。

一日が経過し、とうとうドムが完成した。

武装は360mmロケット砲

どんな装甲も爆散させる破壊力を持っているだろう。

更にヒートサーベルはドム以外の全機にも配備し、ドムは合計18生産した。

その内5機は拠点の防衛を、それ以外の20機で魔物を駆逐していく予定だ。

ドムには全て最新式のCPU LV5を配備している。

加えて、全てのドムに対レーザーコーティングを施し、拠点のレベルを1上げる。

拠点にも強力な対レーザードームを張れる建物を建設し、拠点の防衛性を強化した。

その為か、自機の強化も合わせてかなりのポイント^{ポイント}を消費し、懐^{ポイント}がかなり寂しくなってしまった。

暫くポイント稼ぎに専念する事に決め、それから三日間は魔物の駆逐に専念した。

そして、三日間でドムを10機増やし貯金を増やしカイは、次の予

定を考える始めた。

120mmは強力なのだが、集中放火しなければ硬い前衛の魔物には弾かれる事がある。

360mmロケット砲のお蔭で今は問題無くなってきたのだが、新たなマシンガンの開発は必要だろう。

更にまだ問題はあり、カイのザクの性能が急激に上昇した事により、カイはザクの性能に振り回される事が多くなってきた。

（反応速度上昇はポイントがかなり掛かるが、仕方ないか）

カイはそう思い自分の反応速度を10%上昇させる、ジオン軍の兵法書 初級編 を10000ポイントで入手した。

更に、反応速度を30%上昇させる、ジオン軍の兵法書 中級編 も続けて50000ポイントで購入し、カイは自分自身を強化させた。

すると、カイの技術力Lvが6にレベルアップする。

（予想以上に早いレベルアップだ、自己強化は高額な代わりに技術

力が上がり易いのか?)

カイはそう考え、喜びに笑みを浮かべた。

次のMSの開発は技術力がLv8必要だ。

何を開発できるかは、欄が?????となっていて、わからない。

最初には技術力Lv3までの情報は、公開されていたのだが、それ以上はわからなくなっているようだ。

しかし、カイは叔父からある程度の攻略情報を聞かされている。

(アンドロイドの必要技術Lv10必要だった筈だ。それ以外の情報もメモしておこう)

カイはそう思うと、紙に叔父から聞かされた情報をメモしておいた。

次に問題のザクマシンガンだが、口径を150mmに変更し、尚且つ初速を上昇させ、射的を伸ばしたオリジナルのザクマシンガン、

ザクマシンガン巨砲型に変更しようとした。

しかし、通常のザク？では反動が強すぎて、実践で使えなかった。

よってカイは自機専用の兵器として、このザクマシンガンを使う事にし、これからはドムを量産していく事に決めた。

しかし、小型種にはザクマシンガンは有効で、しかも中型や大型もザクマシンガンで倒す事は可能だ。

その為カイは、一応ザクを十機は揃えておく事に決め、それ以外をドムにする事に決めた。

脅威の陸上型MS（後書き）

閲覧ありがとうございました m

〔
m

巨大、進撃する要塞（前書き）

2話目投下します（＾－＾）／

巨大、進撃する要塞

今日もカイは、魔物を狩り続けていた。

ドム40機にザク11機の部隊は、大量の敵を狩り続けてはポイントに変換していく。

（最近はや業になってきた、対レーザーコーティングで光線も対処できるようになったし、もうすぐ技術力がLV8になるから、新しい機体も開発できる。

そろそろ行動範囲を広げてみるか）

カイはそう考え、部隊を何時もより進めて行った。

敵は突撃するしか能がないようで、次々とロケット砲の餌食になっていく。

時々ロケット砲の弾幕から敵が抜けてきても、ザクマシンガンによってひき肉にされる。

「むっ、あれは何だ？」

カイはMS部隊を進めている最中、かなりの数の魔物をレーダーで察知した。

（これは何かあるようだな）

カイ部隊を慎重に進めていき、敵も徐々に近づいてきた。

「ちっ、レーザー型がいるのか」

カイは光線を撃ってくる敵の事を、レーザー型と呼ぶようになっていた。

超距離攻撃を仕掛けてくるレーザー型は、一番厄介だとカイは感じていた。

しかも、今回はカイは新しい種類の魔物を発見していた。

その姿は、カイの今まで見た魔物の中でも一番巨大で、鈍重な魔物だった。

その魔物は次々と体から小型の魔物を生み出し、カイ達に向かって殺到させてきた。

「ふん、デカブツが。
ここまで接近できれば、最早レーザー型も敵ではない！」

カイはそう言うのとザクマシンガンを乱射し、先ずは厄介なレーザー型から片付けていく。

次にカイは巨大な魔物に標準を定めて、ザクマシンガンを発射する。

ザクマシンガンの弾丸は、敵の身体を抉っていくが、敵が巨大な為か致命傷を与える事ができない。

「弾丸の無駄か」

カイはそう言うのと直ぐに武装を変更し、360mmロケット砲を自機に装備させた。

通常のザクが反動で故障するような口径だが、カイの改造を施したザクは、壊れる事なく、このロケット砲を放つ事ができる。

ロケット砲の火が吹き、魔物に命中、続けて放ったドムの同口径のロケット砲も魔物に命中し、魔物を爆散させた。

「むっ、あの敵は一体10000ポイント貰えるのか！
これは旨みがある敵だ」

実際には要塞型の体内にもBETAがいる為だが、カイにはわからない。

カイはその後近づいてきた大型の魔物を見ると、ロケット砲を粒子に変えてビームサーベルを構える。

魔物の長く太い腕のような物がカイのザクに向かって振るわれるが、カイはその腕をヒートサーベルで切断し、更に魔物の身体を真一文字に切り裂いた。

「ははっ、最高だー！！」

カイは次にザクマシンガンを両腕に一丁ずつ生産し、辺りの小さな魔物を掃討する。

そして、最後にスラスターで部隊は空中に滞空し、その後クラツカ―を下に投げつけ、一体残らず魔物を退治し終えた。

（巨大型は三体いたが、中には一体5000前後の奴もいたみたいだ

この群れだけで、三万ポイントも稼げた。
巨大型は狙いだな)

カイはそう思い、更に敵を探しに部隊を動かした。

最近の開発に力を入れる事を止めていないが、ポイントの貯蓄もカイはある程度進めていく。

軽くしか読んでいなかった説明書をカイは最近じっくりと読み、ショートカット設定という機能をカイは、発見した。

ショートカット設定とは、例えば、ボタン一つでMSの生産と武装の生産、CPUの生産を一度に行うよう設定できるようにしたりできる機能で、これでカイは効率良くMSを補充できるようになった。

カイはザクの雇用や、ドムの補充等を幾つか設定し、武器もボタン一つで変更できるように設定した。

これで部隊の武器を一瞬で変更したり、僚機が撃破された瞬間にまた生産して補充する事ができる。

「技術力LV8になったら、拠点防衛用MSを20機と、自動補充施設を設置し、拠点の強化も進めるか」

カイは顎に手を当てて考えながら、そう呟く。

技術力Lv8の新MSを生産したら、カイは三日かけて辺りを探索するつもりだった。

現在地が自動で確認できる、地図を生産できたのでカイは現在地が中国であるとわかっていた。

自動翻訳機も生産し着けたので、中国語でも理解できる筈だ。

できるなら、日本に行きたいとカイは考えていたが、今の状況がわからないので、とりあえず人を探す事が先決だと考えていた。

（本当は技術力をLv10まで上げてから行動に移した方がいいかもしれないが、いい加減ポイント稼ぎだけでは飽きるからな）

カイは更に数日でポイントを稼いでいき、MSを増やす事に専念していった。

そして、その頃。

ようやくカイの存在に気づく国が出始めていた。

かなり遅い発見だが、各国は防衛にそれだけ必死なのだろう。

そして、カイの存在に最も早く気づいた場所は、カイの部隊を見て、何とか最初に接触しようと、模索を始めていた。

そして、その間もカイは開発を続けていく。

技術力Lvは8に上がり、新たなMSが増えるが、カイはそれほど喜ぶことはない。

Lv8で開発できた機体はなんと4つ、ゴッグとアッガイ、ズゴック、そしてグフだ。

ズゴックはいずれ活躍できる筈だが、グフは完全に接近戦タイプであり、カイはグフの生産に乗り気ではなかった。

それ以外の二つは、生産されるかさえ微妙な所だ。

とりあえず4種とも一応開発はされたが、生産されたのはズゴック一機とグフ一機だけだった。

ズゴックは様々な改造を施し、真紅と黒のペイントを施して、カイの水中専用機にする予定のようだ。

そして、カイは今回のMSはまだ使えないので、戦力は今回の開発ではそれほど変わっていないと判断し、拠点から離れる事を一旦断念した。

そして、しばらくは開発に専念していく事にして、技術力LV10を目標にする事にした。

巨大、進撃する要塞（後書き）

閲覧ありがとうございました

カイの野望（前書き）

修正版です。

閲覧よろしくお願ひします m
〔
m

カイの野望

魔物を狩り続け開発に集中した結果、ついに技術力Lvが10に到達した。

新たに開発できるようになった機体は、ゾック、ギャン、リックドムの三種類。

カイはおそらく次の13Lvで、ゲルググが開発できるようになるだろうと予想した。

そして、今回の目玉は何よりもアンドロイド開発だろう。

機体の操作Lvは、アンドロイドLvを最大まで上げたLv10で、CPUのLv10と同等だったので、他の仕事もできる分、アンドロイドの方が優秀だ。

しかし、カイはいきなりアンドロイドを大量生産する事はせずに、男性タイプを4体と女性タイプ4体しか製造しなかった。

男性タイプにはそれぞれ改造したグフかドムに搭乗させ、女性タイプにはオペレーターをさせる事にカイは決めた。

続けてカイは蠅のような偵察機を開発生産し、更にレーダーも高性能に改良して、効率良く動けるようにした。

（所詮はアンドロイド欲情はしない。

オジキが見てたら、終わった後からかわれそうだしな）

カイはそう思うと、普段通り魔物を狩りに出発する。

ポイントの貯蓄がもうすぐで50万ポイントになり、貯蓄が終わったら拠点を放棄して移動する予定だ。

「それにしても、本当に生きている人間に会わないな。まさか人類が絶滅した世界とかは、ない筈なんだけどな」

カイがそう言いながら、隊を進ませていると、レーダーに赤でも黄色でもない始めて見る、白い点が映し出された。

『未確認物体が現在魔物と交戦中です。

生態反応から、おそらく人間だと予測されます』

カイはオペレーターの言葉を聞き、どうするか考え始める。

これは果たしてイベントなのか、カイは考えるが答えはでない。

しかもオペレーターから更に詳しく聞くと、どうやら人間側の方が押しているようだ。

ここで加勢しても、混乱を生むだけだろうとカイは判断し、速やかにその場から撤退する事に決めた。

そして、カイ達は撤退し、しばらく進み続けるが、何故か再度白い点が前方から接近してきていた。

（何だ、先ほどとは別の部隊か？）

カイは考え、ドムとザク達に警戒態勢を取らせながらも、部隊の移動を停止させた。

すると、相手の部隊もカイ達の部隊が見える位置まで来ると停止し、両部隊は向かい合う。

相手の機兵の内、一番先頭にいる機兵はカイ達を観察していく。

大量のドムと十機のザク、それに四機のグフと真紅のザク一機。

相手の機兵は、カイがリーダーであろうと判断したようだ。

外部スピーカーで、カイに向かって声をかけてきた。

『こちらに敵意はありません、代表の方はいらっしゃいますか？』

相手は英語でそう話しかけてきた。

英語はおそらく公用語として扱われていると思われるので、相手が何処の国の機兵なのかはカイはまだ判断できない。

『私がこの隊の代表です』

カイはそう言うと、一歩前にザクを進めた。

『こちらは中華民国特殊戦術部隊です、そちらの所属をお聞きしてもよろしいですか？』

その言葉にカイは、一瞬考えた後答える。

『こちらはジオン傭兵部隊です。
国の所属では残念ながらありません』

カイがそう答えると、何故か相手の部隊にカイは歓迎され、その部隊の基地に招待された。

(……イベントか？日本軍かと思っていたが、台湾軍か。
まあ、話だけは聞いておくかな)

カイはそう思うと、10万ポイント程消費し、自分の身体能力を二倍程に改造した。

カイは基地まで案内されると、MSから降りて軍の司令官の部屋に案内された。

カイはジオン軍の弁術指南書を部屋に入る前に慌てて使い、司令官の部屋に入った。

司令官の部屋のカレンダーを確認すると、驚くことにこの世界はまだ1976年らしい。

カイは司令官の話を聞きながら、平行して基地にばらまいた蠅型の盗聴機からも情報を仕入れていく。

そして、魔物がBETAということ、BETAの進行で中国がかなり追い込まれている事等がわかった。

そして、追い込まれた中国は中華民国に共闘を提案してきたらしい。

台湾と中国は元々政治的には犬猿の仲だった。

しかし、こうなってしまったら中国に頼るしかない。

何故なら台湾は小さく、中国の助けがなければ、BETAに呑み込まれるしかないからだ。

しかし、その状況で台湾はある地域で、BETAが次々に駆逐されているのを発見する。

カイ達の部隊だ。

そこで中華民国政府は、カイに協力を依頼し、BETAから台湾を守りたいのだそうだ。

（提示された額はなかなかだな、ドル払いなのもいい。
もし、裏切っても蠅型の偵察機で丸わかりだ）

「わかりました引き受けましょう」

カイはそう考え、依頼を受けることにし、司令官と握手を交わした。

そして、カイはそれからめざましい活躍を戦いの中で中華民国に見せつけていく。

ドムの360mmによるBETAの駆逐、しかも無限に弾を絶やす事なく打ち続けていく。

その上、カイの部隊のMSに搭載されたCPUは八時間稼働したら一時間休憩が必要だが、実質一日に三時間も休憩せずに働かせる事ができる。

しかも、MSは破壊されてもすぐ補充され、逆にBETAを倒す程、MSの数はどんどん増えていく。

（金は貰える上に、ドムの数は既に500機を越えた。
イベントは起きないが、今のところ順調だな）

そして、カイの防衛力を過信した中華民国は、中華人民共和国の共闘要請を拒否。

中華民国政府は、カイを手放す事が出来ない状態に自分達を自分から追い込んでしまった。

（犬猿の仲だとは思ったが、ここまで愚かな判断をする程だとはな）

カイはそれを聞いて呆れていたが、まあ色々事情があるのだろうと自分を納得させた。

台湾を守るためにカイは、現在それなりに苦労していた。

相手の物量攻撃は今まで戦った時の比ではない程激しく、その為MSは次々に破壊されていった。

そのためカイは、一旦開発を停止し、MSの生産に集中した。

一体破壊される度に三体生産する感じでカイは、次々にドムとズゴックを生産。

ドムだけで現在は500機。

ズゴックは300機稼働している。

ズゴックは水中専用であり、島国である台湾を守るのにはかなり適している。

更にカイは台湾政府と交渉し、台湾に食品会社を設立した。

台湾は現在、中国からも食料が輸入できず、深刻な食料問題に直面している。

そこでカイが僅かなポイントでそこそこ上手い食料をどんどん生産し、どんどん安く売っていき、民衆も喜び、カイも喜ぶ。

食料生産は、ポイントがほとんどかからなくなってきたので、リスクは少ない。

作業用のアンドロイドにポイントを消費するが、そこは割り切るしかないだろう。

そして、更に1ヶ月が経過すると、また新たな問題が浮上してきた。

それは今まで只でさえ大打撃を受けていた台湾の食品会社が、カイの会社の安価な食品が出回ったせいで次々に倒産。

大量に浮浪者が増え始めたようだ。

カイもそれは予想していたが、仕方ないとも思っていた。

千人浮浪者が出るかもしれないが、そのお陰で二千人が餓死せずに済むかもしれない。

だが、台湾政府はそれを黙って見ている訳にはいかない。

雇用の促進と、B E T Aの対策の為、軍備を拡張する事を表明した。

それを聞き付け、カイはザク？とアツガイの販売を政府に打診した。

アツガイとザク？は生産性に富んでいて、今のカイの技術力L Vである12ならば、様々な武装付加を施しても、一機につき800ポイントで済む。

しかも、その機体がBETAを倒したら、カイにポイントが入ってくる。

現在対BETAの主力は戦術機だが、まだ第一世代。

ザクは機動力こそ、第一世代より少し高いだけだが、火力は第三世代並み。

しかも、ヒートサーベルによる接近も可能。

操作方法はどちらかの手でレバーを握めば、まるでゲームのように簡単に動かせる仕様だ。

カイの打診の後、戦術機第一世代とザク？が未来で行われた事を再現するかのように対決する事が決定した。

ザク？と対決する機体はF-4ファントム。

アメリカ製の第一世代戦術機だ。

F-4ファントムには台湾人パイロットが乗り、ザク?にはカイが生産したアンドロイドLV13が乗ることになった。

ザク?とF-4ファントムが対峙し、試合は開始された。

F-4ファントムの武装は105mm滑腔砲と機関銃。

機関銃はザクの強化された装甲にはそれほどダメージを与えられない。

その上、105mmの滑腔砲は旧ザクが使っていたザクマシンガン
の劣化品。

火力もザクが上回っている。

F-4ファントムの滑空砲を回避し、ザクはカイによって追加されたホバーによってF-4ファントムとの距離を詰める。

防御力が高い第一世代戦術機のだが敏捷性はザクには劣る。

ザクはヒートサーベルをF-4ファントムのコックピットに突き付ける。

そして、勝敗は決した。

政府はしばらくの検討し、ザク？100機をテスト用に導入する事を決定した。

そして、ザクは中国本土において戦いでめざましい成果を上げていくのだった。

ザク？の生産開始。

しばらくした後、アッガイの生産も開始する。

両機の値段は第一世代戦術機の十分の一程だ。

問題点はザクの修理が不可能な点だが、カイが簡単に使用できる修理用機器やエネルギー補充用の機器を販売し、問題は解決した。

MSの生産には、カイが設置した拠点を利用。

技術Lv12で出現した、拠点開発の一つである量産機工場を設置し、地元の住民を雇っていった。

これを設置してMSを生産すると、量産機ならばポイントの消費が抑えられるようだ。

（これって内政ゲームだったか？）

カイは疑問を懐くが、叔父がやろうと思えば、ジオン公国を建国できると言っていたのを思い出した。

（かなり自由度の高いゲームだからな、もしかしたら台湾を足掛かりにして、ジオン公国を作れるんじゃないか？）

カイはそう考え、これからの予定を頭の中で考えていく。

カイの野望（後書き）

閲覧ありがとうございました m
〔
m

新進気鋭のMS軍団（前書き）

今回はツツコミ所が多いかも、反応が怖い。

感想をくれた皆様ありがとうございました。

閲覧してくださる皆様にも、感謝していますm
〔
m

新進気鋭のMS軍団

中華民国が中華人民共和国から完全に独立を宣言。

それに反対した中華民国の政治家は、中華民国から脱出し、中華人民共和国と手を結んで統一中華戦線を結成した模様。

しかし、それでも統一中華戦線はBETAに押され続け、後退し続けているようだ。

カイはゲームの世界で既に100日、つまり現実で10日経過したのだが、まだ出るつもりなかった。

カイはまだゲームをクリアできそうもない為、ある手段に出た。

それはゲームの世界と現実世界の時間を更に離す事だ。

具体的には、現実世界の1日をゲームの世界の100日にする。

これでカイは後8年近く、この世界にいる事ができる。
これをやると、ゲームが終わった後に頭が痛くなるらしいのだが、カイはやむを得ず決行する事にした。

そして、カイがゲームの設定を弄った瞬間、現実世界で植物人間と化していたカイの身体は、死亡してしまった。

しかし、カイはそれに全く気づく事はなかった。

そして、カイはその日、CPUと台湾軍兵士から供給されたポイントを使い、開発を進めていた。

そして、それが終わると予定されている、台湾政府総督との対談が行われる施設に、アンドロイドの秘書を連れて向かう。

「貴社のザクは相変わらず素晴らしい性能を誇っています。しかし、一部のパイロットからは機動力に不満が出ていると報告が出ています。その辺りは改善はできますか？」

カイは台湾総督と握手を交わし、席に座ると早速そう尋ねられた。

「そうですね……我が社の傭兵部隊で正式に採用されているドムを配備できます。

しかし、やはりザクと比べるとコストが掛かりますので、値段も上がってしまいます」

カイは総督にドムのスペックが書かれた紙を手渡しながらそう伝え、それからドムの性能を総督に伝えていく。

目玉はやはり、強化されたホバーにより、第二世代戦術機並の機動力を実現した所だろう。

しかも、近づく敵に対しては胸から拡散ビームを隠し持ち、小型のBETAなら仕留める事ができる。

更にドムの主装備のロケット砲、ジャイアント・バズは、確実にBETAを仕留められ、要塞級を数発で仕留める事が可能だ。

そして、カイの交渉で少しずつだがドムも配備していく事に決定した。

数万の大群で責めてくるBETAに対して、MSはこれまでかなり少数だったのだが、今はザクを何と一万体生産する事に成功している。

最も、台湾の人口はBETAの襲撃により減少し、人口は一万人程しかない。

よって、一万のザクの内80%以上はカイのアンドロイドだ。

なので台湾の総督は、カイに大きな態度を取る事ができない。

しかも、カイの部隊を傭兵として雇う費用の一部を、台湾政府は勲章や軍の位等で免除してもらっている。

因みにカイはそのお蔭で、カイは中華民国MS部隊指令の位をもらい、現在少将として働いていた。

名目上政府が上だが、政府はカイに頭が上がらず、中將や大將も無闇にカイに命令できない。

カイは総督との話を終えると、自らが建設した軍事基地に向かい、あるMSの前に立っていた。

「遂に完成したか……ゲルググが」

カイの目の前にはザクに類似した、新たな機体が佇んでいた。

深紅地に黒い線を走らせた、カイ専用の塗装を施しており、既に前のザク以上の改造が施してあった。

「愛機^{ザク}から変えるのは残念だが、ザクを改造するにも、残念ながら限界があるようだったからな」

カイはそう言うと、ゲルググに搭乗し、しばらくの間操作練習に励んでいく。

（まだ微妙に機体と操作が一致しない。
慣れるまではザクの方が、良さそうだな）

そう思い、練習を終了させた。

実はゲルググの後に更にもう一機生産が可能になったのだが、カイはまだそれを生産すらしていない。

その機体の名はビグ・ザム。

その全高はザクの約三倍の59,6メートル。

360度全方向にメガ粒子砲を放つ事ができ、艦艇を一撃で仕留める威力を持つ。

しかし、ゲルググのビームライフルもそうだが、ビーム兵器を無闇

に使うのは、よろしくないとカイはこの世界の技術力を見て感じていた。

普通のゲームならば、気にせずオーバースペックで無双してもいい気がするが、これはカイの叔父が作成したゲームだ。

あの凝り性の叔父が作ったゲームでそれを行うと、どうなるのか予想できない。

一先ずカイは、ビーム系兵器を水中戦用のMSにのみ使用させ、水中でしかビーム系兵器を使えないと思わせるようにした。

そして、かなり遅れて何故か突然連邦のボールが、開発可能になっていた。

カイもこれには首を傾げたが、もしかしたら叔父が連邦のMSもかなり遅れてなら生産出来るようにしていたんだと自己解釈し、納得する事にした。

最もボールは生産性は高いが宇宙でしか使えず、ザクの蹴りでやられるレベルなので、カイは開発こそしたが、生産はしなかった。

そして、更にゆっくりと時間は経過していく。

カイが台湾軍に入隊してから、一年が経過しカイの技術力はレベル20となった。

Lv19から20までの過程で、かなりの開発が必要だったので、Lvアップも徐々に遅くなってくるだろう。

カイが今回開発出来るようになったのは、ガルバルディαとガンタंकだ。

未だザクが主力の戦場ではハイスpek過ぎるため、ガルバルディαの生産は未だ行われていない。

逆にガンタंकは操作しやくなる機能が予想以上に効果を発揮し、初心者でもほとんど訓練無しで乗れる程の、操作しやすい機体になっていた。

その為、後方支援用に韓国軍に出荷していく事が決定し、BETAに対して成果を上げていった。

そして、最近ではMSの情報を盗もうとする産業スパイが、多数カイの設置した工場に侵入するようになっていた。

しかし、MSの生産はアンドロイドがほとんどを行い、民間人は簡単な作業を行う仕事にしか着けないので、各国のスパイはなかなか情報を手に入れる事ができない。

しかも、アンドロイドが組み立てるので、MSの設計図はアンドロイドの媒体の中にしか入っていない。

アンドロイドを脅しても意味がなく、アンドロイドを破壊すれば粒子となって消える。

ザクも同様に、破壊された部品は戦場で回収できず、解体する事も粒子となる為不可能だった。

その間にも歴史は進む。

欧州では連合軍が大反功が実行され、BETAの拠点であるハイヴへ連合軍が襲撃した。

しかし、結果は惨敗。

欧州の連合軍は致命的なダメージを受け、兵力を大幅に失った。

カイはその作戦の一部始終をスパイさせていたアンドロイドのアイカメラから見えていたが、ハイヴに蠢く凄まじい数のBETAを見て、BETAの危険性を再認識した。

（MSに慣れていなかった台湾兵も、一年の間に練度を上げていった。

そろそろザクのスペックを向上させ、発表する事にするか）

カイがそう考えた三ヶ月後、カイは新たにザク？改修型を発表、基本能力を全てドム並の機動力と全体強化を施されたザクが台湾兵士に支給されていた。

カイが考えるザクの展望は、何かを犠牲にする事なく、全体を強化していくバランスの良い機体だ。

防御を犠牲にしたり、機動性を犠牲にして突き詰めていくのは、他の機体でやればいいと、カイは考えている。

実戦で戦う兵士達からのザク？改修型に対する評価は良好だったが、一部ドムを愛機としている兵士から不満の声が上がっていた。

機動力が売りのドムとザク改修型の機動力が同じでは、ドムの影が薄くなっていく。

その為カイはザク改修型発表の半年後、要望に答えてドム改修型を発表した。

機動力が更に増加され、ジャイアント・バズにも改良を加えられたドムの機動力は、戦術機第三世代に匹敵し、火力はそれ以上だ。

しかも、ザクより遥かに強固な装甲は、犠牲にされる事はなく、逆に多少強化された。

これらの無茶な性能強化が可能になった背景には、カイの技術力レベルがLv22になったという背景もあったかもしれない。

ドム改修型の生産は月産30機程だったが、台湾兵がドム改修型を見る機会も徐々に多くなる。

凄まじい攻撃に加えて機動性に富み、ザクよりも強固。

台湾兵からは、高機動要塞等と呼ばれる事もあったようだ。

そして、カイは久しぶりに台湾から離れ、ユーラシア大陸へと降り立っていた。

理由は今まで訓練したカイ専用ゲルググの実戦を、カイ自身が行う為だ。

ジオンの兵方書 上級編を使ったカイの反応速度は二倍になっており、練習によってゲルググの習熟度を上昇させていた。

武装は高出力ヒートサーベルと、ザクマシンガン改。

カイによって改造が加えられており、性能的にはあのガンダムよりもハイスペックだ。

久々の実戦にカイは多少緊張していたが、BETAの大群を前に気を引き締める。

『あんまり先行しないでくださいね』

カイが進もうとするとカイの直ぐ後ろにいる、四機のMSの内の一機がそう言った。

その男の名はシメイと言ひ、カイの側近の1%それ以外の二人の側近はアンドロイドだが、アンドロイドLV20は、人間との見分けが全くつかない程の完成度であり、人間よりもスペックはかなり高い。

台湾人の側近二人はそれなりにMSが扱えるが、実戦兵士には劣る。

その為、操作性と使いやすさに台湾軍でも定評のあるザク？改修型に搭乗していた。

因みに、側近のザクには頭部にブレードは付いていない。

そして、アンドロイドの側近二人は、第一線で戦う兵士すらも上回る操縦が可能だ。

その為機体は、新たに開発された機体であるドワッジと、グフを改造したグフカスタムに搭乗させてある。

ドワッジはドムの発展機体であり、ドムを越えた更なる機動力と、砂漠でも壊れない頑丈さがうりの機体だ。

グフカスタムも側近戦に置いては、他の追隨を許さないスペックと

なっている。

その他にも、ドム十機とザク二十機を引き連れた部隊は、BETAに向かってMSを進めて行く。

『前方にBETAの反応があります。
総数は約300体ほどだと思われます』

オペレーターの言葉を聞き、カイは口許に笑みを浮かべる。

ようやくゲルググの実戦を行えるのだ。

カイが出撃する事に、台湾政府も猛反発したのだが、結局カイが押しきった。

台湾政府は、今や台湾の心臓部分であるカイが負傷した時の損害を予想し、顔を青くさせていた。

『「問題は何もない、このゲルググは現在この地上で最強のMS…
…いや、現在では地上最強の人型兵器だ」』

カイはそう言うと、BETAの大群に向かって突貫する。

無線でその言葉を聞いた瞬間に、カイが突貫し始めたのを見て側近達は驚き、MSの動きを停止させた。

しかし、それ以外のMSはアンドロイドとCPUしか搭乗、搭載されていなので動揺しない。

直ぐ様援護射撃を行い、側近のグフカスタムはカイに付き従って突貫していく。

『「ははっ、遅い遅い」』

BETAの光線を凄まじい勢いと反射神経で避け、カイは笑いながらそう言った。

突き進みながらも、ゲルググはザクマシンガン改をBETAに掃射し、次々とBETAを片付けていく。

『「現最強のスペックを見せてやろう」』

カイが改造が施されたヒートサーベルを振るうと、ヒートサーベルの刃が伸びる。

カイはヒートサーベルを自由に伸び縮みさせられるよう改造し、更にヒートサーベルの出力も強化していた。

『「ふむ、300では手応えがないな」』

ゲルググの周りには血によって大量の血溜まりが形成し、その中でも真紅のゲルググは側近の目にも良く映った。

『「やはりザクに比べるとクセが多少あるが、特に問題も見当たらない。」

次の群れと戦う時には、アレを試してみるか」』

カイはそう言うと、ポイントで変換したドリンクを飲み、一息つく。

台湾近辺の中国は、まだBETAに対して戦線を維持している。

しかし、それ以外は押されているらしい。

（これは支援も考えるべきかもしれないな）

カイはBETAを踏みつぶしながら、そう考えていた。

新進気鋭のMS軍団（後書き）

どうだったでしょうか？

カイ専用ゲルググに関してですが、本来のゲルググよりも更にポイントをつぎ込んで生産した、魔改造です。

ゲルググは地の利もありましたが、ZZでも使われて活躍はします。

魔改造を施せば、Zくらいの機体には追い付けるのではないかと思います。

ポイントコストは、カイは自機の為に気にしていません。

実はカイのゲルググには、更に秘密がありますが、それはまた……。

後皆様にお聞きしたいのですが、戦術機は1師団につき108機ですよね？

多くても1師団で、324機だと自分は思っています。

違うのなら、どうか教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1342z/>

マブラヴ暴走機械

2011年12月7日00時45分発行